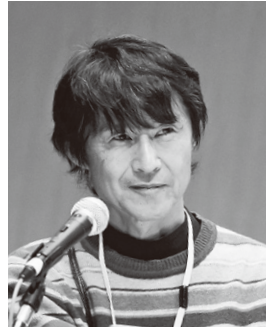


## 研究発表Ⅰ 展示

### 「見える」から世界遺産を捉えなおす

高橋 雄一郎（獨協大学）



昨年、ユネスコの世界文化遺産に登録された、「明治日本の産業革命遺産」を取り上げ、視覚と展示の視点から、世界遺産への登録が、近代日本という国家創設の神話の再生産であること

を問題視する。発表の前提として、展示が見る者にパフォーマンスとして働きかける点、展示という行為を通じて、過去が、現在の要請により構築される点を確認しておく。ローラ・ジューン・スミスは、「遺産は、アイデンティティ、記憶、場所や所属の感覚を構築、再構築する文化的パフォーマンスである」と主張している。

「明治日本の産業革命遺産」には、「製鉄・鉄鋼、造船、石炭産業」の副題が付けられていて、一八五〇年代から一九一〇年までに建設された高炉、造船施設、邸宅、炭坑跡など、二十三箇所の構成遺産からなるシリアル・ノミネーション

という形をとる。これらは、日本が他のアジア諸国とは異なり植民地化を免れ、欧米をモデルとした急速な産業化・近代化を達成したという物語を展開する。強調されているのは、欧米に留学した薩摩、長州の若きサムライたちが指導者となって日本の近代化を牽引した点である。産業施設ではない山口県萩市の松下村塾が構成遺産に含まれたことには、こうした背景がある。しかし、吉田松陰の拡張論者としての側面や、植民地化を免れた日本が、アジア・太平洋地域を植民地化していったことに、「明治日本の産業革命遺産」は触れていない。これは、自民族中心で、排他的な発想である。

「明治日本の産業革命遺産」では、このような修正主義的な歴史観が可視化され、ユネスコの世界文化遺産登録により承認・正典化され、保存、展示によって国民の集合的記憶として成型されることが問題である。そこからは、強制労働の対象となった朝鮮人、中国人、連合軍捕虜をはじめ、搾取された人たち、差別や抑圧された人たちの記憶が抜け落ちている。文化遺産による展示が排除につながってはならない。

国連機関の一つであるユネスコの参加主体は国家であり、超国家的な発想を求めることには限界がある。ポスト・ナショナルな時代に見合う思考の転換が求められている。

獨協大学外国語学部交流文化学科教授。修士「英米文学」、上智大学「パフォーマンス研究」ニューヨーク大学「著書に「パフォーマンス研究―身体化する知」(せりか書房、二〇〇五年)など。